

カキ新品种の施設栽培

作型の多様化を図るため、渋カキの刀根早生、甘カキの新秋・太秋の施設栽培について検討した。

1月中旬からの段階加温（最低気温を6℃からスタートし、1週間隔で2℃ずつ昇温、4月下旬以降18℃）により、露地に比べて収穫期は30～40日前進し、果実重及び糖度も向上する（表）。

表 ハウス栽培における生育と果実品質（平成8年度）

品種名	発芽期 (月日)	開花期 (月日)	熟期 (月旬)	1果重 (g)	糖度	果皮色 (チャート)	硬 度 (kg/cm ²)	含核数 (個)
刀根早生	2/14	3/21	8下～9上	275	16.7	5.6	1.6	0.0
新 秋	2/16	3/26	8下～9上	244	19.2	4.4	2.2	4.7
太 秋	2/16	3/30	9上～9中	385	19.2	4.5	1.3	0.8

刀根早生は樹勢の低下もみられず、着花・結実性ともに安定しており最も作りやすいが、軟化防止のための樹上脱渋に労力を要するのが難点である。また脱渋処理時に果皮に亀裂を生じることがあるが、固形アルコールの処理時間を従来の24時間から4～6時間に短縮することによりある程度軽減できる。

新秋は甘味の極めて強い品種であるが、露地では汚損果（果皮の亀裂）が最大の問題となる。ハウス栽培により発生を軽減することができるが、葉陰の果実やハウス内が高湿になると汚損を生じる。元来着花性の良好な品種であるが、ハウス栽培では遅れ花による着花過多により翌年の母枝が不足することがある。着花過多になると樹勢が衰弱するので、

摘蕾摘果を徹底し適正着果に努める必要がある。種子を形成しないと生理落果し易いため、ミツバチやマルハナバチによる受粉の徹底が必要である（図）。受粉樹には雄花の着生し易い太秋も利用可能である。

太秋は果肉が爽やかで甘味が強く、食味評価の極めて良好な大果系品種であるが、露地栽培と同様雄花が着きにくいいため生産が不安

定となりやすい。雄花はやや長めで充実した母枝にしか着かないため、強めの切り返しや予備枝の設定などにより、常に勢いの良い新梢を出させるような特殊な樹体の管理が必要である。汚損果につい

ては、条紋はある程度軽減されるが、花柱痕の周囲に見られる果皮の亀裂や条溝果は露地よりも多発する。自家結実性が高いので受粉不良による生理落果は少ない。施設栽培により熟期の促進は可能となったが、汚損果の軽減や着花の安定などさらに経済性の高い技術の確立を図る必要がある。

（鬼北分場：分場長 二宮 敬和

現在、農産園芸課 技術課長補佐）

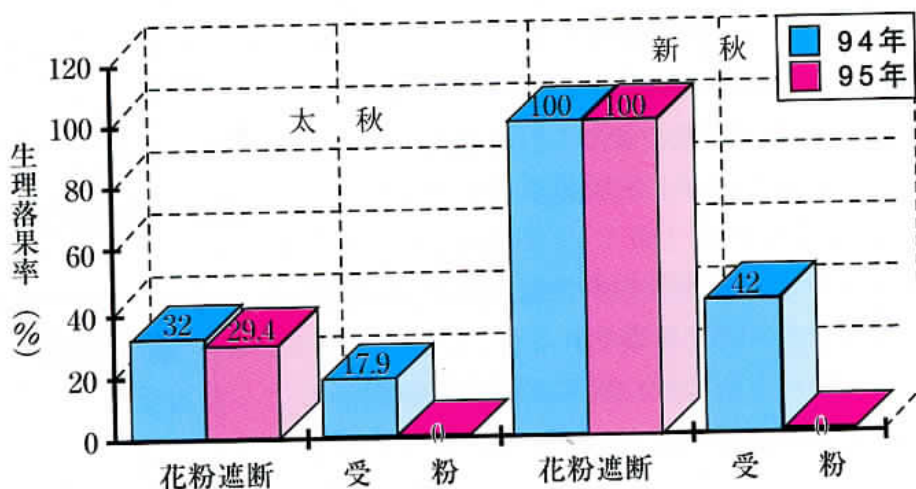


図 受粉条件と生理落果